

横浜写真史におけるヴィチェンツァ出身のアドルフォ・ファルサーリの活動 ——再発見および研究状況

小佐野重利

はじめに

本論で扱うアドルフォ・ファルサーリの横浜における写真家としての活動については、筆者が中心となって展開した平成17(2005)年度—平成19(2007)年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)によって、ヴィチェンツァでおこなった調査で再発見された写真アルバムおよび関連一次資料や日本の大学や公立資料館が所蔵する写真の調査から新知見が得られた¹⁾。そして2013年には東京のイタリア文化会館および大阪のイタリア文化会館において、その新知見に基づき、ヴィチェンツァにある3写真アルバムから複写された紙焼き写真とドロテア女子修道院に所蔵されるオリジナルの写真アルバムからなる展覧会を企画し、カタログを刊行した²⁾。同展覧会は2020年10月15日から2021年4月(当初は1月10日閉会予定)にかけて、イタリアで新型コロナウイルスが猖獗を極めるなかで度重なる中断を挟みながら、ローマの日本文化会館に巡回展示された³⁾。

筆者は上記の調査研究から得られた新知見を、2007年11月17日の長崎大学図書館主催の日本の古写真に関する国際研究集会 *International Conference on Research of Old Japanese Photographs "International Exchange Depicted in Old Photographs"*⁴⁾をはじめに、2010年10月22日にミラノのアンブロジーアーナ図書館を拠点とするアカデミア・アンブロジーアーナの2010年度集会 *Dies Academicus*⁵⁾、さらに2018年4月5日にミラノ大学で開催された国際シンポジウム *International Symposium, Italy and Japan: Relations and Exchanges through the Arts* で発表した⁶⁾。2020-21年のローマの日本文化会館巡回展の折には、展覧会紹介の小冊子の原稿執筆および東京からイタリア語によるビデオ・レクチャーをおこなった⁷⁾。

したがって、本稿では写真家ファルサーリの生涯と活動のあらましをたどることにする。詳しくは、吉野石膏美術振興財団図書室に寄贈したファルサーリの3アルバムからの複写ポジフィルム、ネガフィルム、および白黒紙焼き写真をはじめとする上記の調査で収集した資料、および主要刊行物を参照いただきたい。

しかし、アドルフォ・ファルサーリの生涯と活動に入る前に、横浜写真について簡単に説明を加える。幕末明治初めに横浜外国人居留地周辺ではじまる、通称「横浜写真」は、外国人写真家フェリーチェ・ベアト(1883頃-1907頃)からライムント・フォン・スティルフリート男爵(1839-1911)を経て、本稿の主役アドルフォ・ファルサーリ(1841-1898)への系譜と、下岡蓮杖(1823-1914)とその弟子たち、ベアトのもとで修業した日下部金幣(1841-1934)、あるいは横浜に移住しファルサーリとパートナーを組むが、その後決別し、ファルサーリと係争を繰り返した玉村康三郎(1856-1923?)の活躍が絡み合いながら発展し、やがて衰微した。

ベアトについては、斎藤多喜夫の『E. ベアト幕末日本写真集』(1987年)、スティルフリートについては、とくにルーク・ガートランの研究⁸⁾、さらに幕末明治の横浜写真史全般についても、2004年刊行の斎藤多喜夫の著書⁹⁾により、全容がかなり明らかになっている。また、すでに言及した2005年度から2007年度に筆者が主導した日本にあるファルサーリ写真コレクションと特にヴィチェンツァで再発見された3冊の写真アルバムなどに関する調査研究とほぼ並行して、日本古写真研究者で収集家テリー・ベネットが、日本古写真および横浜写真史に関する2冊の

著書¹⁰⁾を刊行し、本論にも資するところの大きい新知見を提供してくれた。

アドルフォ・ファルサーリ研究を飛躍的に発展させた功績は、ヴィチエンツァ出身のエレーナ・ダル・プラ Elena Dal Pra に帰せられる。アドルフォの実家は、1898年の彼の死後、早くに未亡人となった妹エンマ・ガルビナーティ・ファルサーリが継いだ。子孫がなかったため、エンマの遺言により、彼女のピアノの弟子であったエレーナの父方の祖母に遺贈された。その家が売却される前に、当時まだ婚約中だったエレーナの母が屋根裏部屋で見出した書簡の束および写真類が、1990年度にパドヴァ大学に提出されたエレーナの卒業論文の核をなすことになった。それを要約した彼女の2論文¹¹⁾と、エレーナとの交友を通して同書簡を利用できたリア・ベレッタの2論文¹²⁾とによって、1990年代にアドルフォの経歴および横浜での活動が明らかになった。特に、ローマの日本文化会館 Istituto Giapponese di Cultura 機関誌 *Il Giappone*, vol. XXXIII (1993) 掲載の論文“L'Avventura Giapponese di Adolfo Farsari (1841-1898)”と、ベレッタの1996年の *The Transactions of the Asiatic Society of Japan* 誌掲載の英語論文、“Adolfo Farsari: An Italian Photographer in Meiji Japan” は、一次資料であるファルサーリ書簡を多く引用しているため基本文献である。このほか、2003年の筆者の予備調査が呼び水となって、ファルサーリ・アルバム1冊を所蔵するヴィチエンツァ市立ベルトリアーナ図書館が、2005年2月12日から4月17日まで企画開催した展覧会“Un vicentino nel Giappone dell'Ottocento, Adolfo farsari fotografo tra ideali e imprenditoria”のカタログ¹³⁾に採録された、アメリカおよび横浜のアドルフォから家族に宛てた書簡からのエレーナによる筆写テキストとカタログ巻末のファルサーリ旧蔵図書目録は、ファルサーリ研究の一次資料として重要である。しかし、展覧会そのものは、これ以外にほとんど学術的な意味をなさなかった。

また、アドルフォ・ファルサーリの年譜は、最近の研究によって判明した限りの事実に基づき、2013年のイタリア文化会館展のカタログの巻末(日伊併記の年譜)と2020年のローマの日本文化会館巡回展の小冊子の巻末(イタリア語年譜のみ)に掲載している。

1. ファルサーリの来日と横浜での活動

ダル・プラの研究以前、日本ではアドルフォ・ファルサーリは、来日時にアメリカ市民権保有者で、イタリア王国籍は喪失していたため、イタリア人とわからず、研究者はファースリと発音していた。長期滞在となる初来日は、サン・フランシスコを蒸気船ベルジック号で出航して横浜港に上陸した1876年9月8日であることをベネットが突き止めた(図1)。1841年にヴィチエンツァの中産階級の長男として生まれ、妹エンマは1848年生まれである。1859年にモデナの陸軍士官学校に学び、その後、第5ナポリ擲弾連隊の士官となり、ピサ、オトリコーリ、フィレンツェに従軍した。1863年には、詳しいことは不明だが、オーストリア船籍のアクイラ号に乗船して、ニューヨークに向かう。到着後、イタリアの家族に秘密のまま、アメリカ人の未亡人マリー・パッチェンと結婚し、同年12月9日には北軍に参加し、第12ニューヨーク騎兵連隊に所属してアメリカ南北戦争を戦う。1865年南北戦争終結とともに除隊する。パッチェンとの間に長男エドワード(腸チフスで10歳で没)が生まれる。1866年にはブルックリンで船荷管理業に従事し、アメリカ市民権を取得している。翌年1867年に次男ヘン



図1 アドルフォ・ファルサーリの肖像写真 (撮影 白井秀三郎 横浜太田町 1876年?)

リーが生まれるが、翌年肺炎で死亡すると、妻がアルコール依存症になり、夫婦仲が悪化した。このためか、1868年にアドルフォは再びアメリカ陸軍に同行して、続く5年間、南アメリカ、西アフリカ、アジア、日本と世界各地を転々とした。1873年もしくは74年に、横浜に寄港した可能性がある。

1876年に横浜に上陸すると、79年に横浜居留地でアメリカ人共同経営者とサージェント&ファルサーリ商会という輸入雑貨商を営んだ。80年に、前年火災で被害を被った商会は移転する。84年には商会の共同経営契約を解消し、ファルサーリ商会を居留地80番地に設立し、輸入書籍、地図、写真を販売する。85年にはスティルフリートから写真館である日本写真協会の経営権、在庫、ネガを購入した。こうして写真館経営と写真家としての活動を開始した。86年2月9日の火災で写真館が焼失し、同時にスティルフリートから購入したネガも失われたため、日本各地を巡る、5か月に及ぶ撮影旅行をおこなった。こうして、彼の写真撮影技術や彩色技術は注目を浴び、87年には、後述するウィリアム・K・バートンから写真彩色技術が高く評価された。

ここで、ファルサーリの最期に係る彼の遺言から見ていくことにする。彼は、1890年4月12日に、現地妻の日本人女性(ナカジマ・ハナもしくはハマ)との間にもうけた娘キクを伴って蒸気船コンゴ号に乗って、故郷ヴィチエンツァに帰国する。横浜に戻るつもりであったが、健康がすぐれないうちに、1898年2月7日、57歳の誕生日の数日前に没し、ヴィチエンツァの公設墓地 Cimitero Pubblico の中の、妹エンマと彼女に先だった夫グイード・ガルピナーティ、さらにはエンマの遺産の分贈処理に登場する弁護士ヴィットリオ・ポルタの眠るカペレッタ74区画の一隅に永眠することになる。埋葬者記録簿 Registro dei defunti dell'anno 1898, Numero progressive generale 108から確認できる。彼は、1895年3月22日にヴィチエンツァで判事兼弁護士ジョヴァンニ・コメンチーノと公証人ジュゼッペ・ファブリス学士に依頼して遺言書を作成する(図2)。その遺言内容が執行されるのは、アドルフォの死後の1898年2月18日のことである。以下に、本文の全文のみを和訳する。

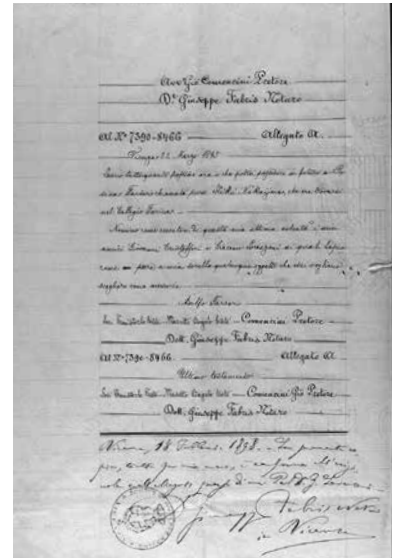


図2 A. ファルサーリの遺言書副本、1895年3月22日作成

文書番号790-8466 別紙A

ヴィチエンツァ 1895年3月22日

私こと、今私が所有するもの、あるいはこれから所有することになるものすべてをキク・ナカイイマ(誤記:ナカジマ?)とも呼ばれる、今ファリーナ寄宿舎にいるロジーナ・ファルサーリに遺贈する。この私の遺言の執行人として私の友人たちジョヴァンニ・クリストフェッリおよびジャーコモ・ロレンツォーニを指名し、彼らには、私の妹に対してと同じく、彼らが形見として選びたいどんな品でも遺贈するものとする。

アドルフォ・ファルサーリ (サイン)

立会人ローシ・テミストクル、立会人マゼット・アンジェロ、コメンチーノ判事、

公証人ジュゼッペ・ファブリス学士

証書番号7390-8466 別紙A

遺言書

立会人ローシ・テミストクル、立会人マゼット・アンジェロ、コメンチーノ判事、
公証人ジュゼッペ・ファブリス学士

[以下は欄外への手書き]

ヴィチェンツァ 1898年2月18日 私の手になる [欠落] 当該副本は私の許にある原本および別紙との相違
はない。ジャーコモ・ロレンツォーニ学士のために
ヴィチェンツァの公証人ジュゼッペ・ファブリス学士

これより、ファルサーリがイタリアへ持ち帰った資産のすべてが娘キクに残されたうえ、彼の形見の品として、妹エンマと友人二人が選ぶままに品々を遺贈したことが推察できる。しかし、アドルフォの家族宛ての書簡類と次に言及する彼が横浜から家族に贈った写真アルバムは、当然のことながら、エンマの所有物となった。

ベルトリアーナ図書館に所蔵される255冊のファルサーリ文庫の来歴については、同図書館台帳 Gonz.6.8.46 に、「ヴィチェンツァ市、1898年にベルトリアーナ図書館が購入した図書および同図書館に寄贈された図書目録」とあるため、購入先、あるいは寄贈者を確定はできない。同図書館司書は、寄贈者はエンマであろうとするが、ことによるとキクに遺贈された図書が半ば寄贈、半ば買い取られた可能性もある。なぜなら、12歳で孤児となったキクは、教師となる資格をとるための学費と女子修道院寄宿舎での生活費に遺産のほとんどを使い果たしたことが、日本の母の求めで東京のイタリア王国大使館と同修道院院長とでやり取りされた書簡¹⁴⁾から推察できるからである。

しかし、アドルフォは、1889年8月16日付の妹エンマ宛ての手紙に、横浜の写真館が火災に遭う前には見事な書棚があったこと、数は多くないが、今でも品質の素晴らしい図書を所有し、小説は一冊もないこと。そして、雑誌の大部分は科学雑誌で、政治雑誌が2冊、もう一つは文学雑誌。政治雑誌は New York Herald とサン・フランシスコの“Voce del Popolo”など、と書いている。また、1889年2月26日付のエンマ宛書簡では、「かれら(画家や写真焼付け師など)がよく知っていることすべてを教えたのは、このわたしです。焼付け師もまたわたしから学びました。ではこのわたしはどこで学んだのか? それは私自身から、つまりすべてを独学で学びました。写真もそうです。すなわち、生身の先生は持ちませんでした。本から学んだのです。必要なものを買って求め、誰の助けも借りずに、写真を焼くか、(ほかの人の)写真を買ったのです。それから、ほかの者に教えました」と明言する。その明言を証明して余りあるのが、ヴィチェンツァの市立ベルトリアーナ図書館所蔵のファルサーリ文庫である。専門家およびアマチュアのための写真技術書の類あるいは科学反応に関する専門書、絵画技法書などが圧倒的多数を占めているからだ。

さて、1888年1月17日付の両親に宛てた手紙で、アドルフォは、横浜で自分が今写真家、画家などをしてしていると記してから、最後に、「あなた方の住所を受け取りましたら、私が作っているものの見本としてアルバム1冊をお送りします」と結ぶ。そして、1888年9月某日の手紙に、「さてやっと、お約束のアルバムを送ります。何か特別のものにしたかったのですが、結局、時間がないことに気づいた次第です。アルバムは私が商売用につくるすべてのものに近いものです。扉絵はやや違います、それだけです。さらに、わたしの事務所の写真が入っています」と書いている。

ヴィチェンツァの(パラッツォ・キエルカーティ)市立美術館所蔵の写真アルバムは、扉絵にタイトル“Viste e Costumi del Giappone/ manda alla sua famiglia/ l'autore”が手書きされ、美しい手彩色の日本の花々装飾が施されている(図3)。表紙は、裏表とも黒地蒔絵・螺鈿細工の装丁である。手書き金彩タイトルは翻訳すると「日本の眺めと風俗。家族に送る。作者」となる。同アルバムは、ファルサーリが両親に贈った見本アルバムで間違いない。1920年3月9日の美術館側文書(AMCVi, Libro copialettere, ms. Sec. XIX(aa.1907-1925), c.60r.)によると、美術館には弁護士ヴィットリオ・ポルタを介して、亡きエンマ・ガルピナーティ・ファルサーリから、ジョヴァンニ・ブサートの描いた夫グイード・ガルピナーティの肖像など12点とともに寄贈された。グイード・ガルピナーティの肖像の特定もなされている。これより

同アルバム の 来歴も判明し、上記書簡に言及されたアルバムと確定できる。なぜなら、第1葉には右欄外に ADOLFO FARSARI と朱文字の縦書きサインがあることにより(図4)、これがファルサーリの事務所を写した写真と断定でき、先に引用した手紙の記述を裏付けるからだ。

同第1葉のファルサーリの坐る右側窓辺の机の奥の壁に色彩表あるいは見本切れなどが額に入られ、かけてある。そのひとつは、“Scotish Imperial Insurance Company”と判読できる証書である。暖炉の上には、額に入ったヴィットリオ・エマヌエル2世の肖像画が掛けてある(図5)。暖炉には恐らく、奈良の猿沢池をパノラマにした写真の入る横長の額とその前に男女の肖像写真が立てかけてある。肖像写真の女性のほうはエンマ、もしくは母らしいが、それ以上の人物同定はほとんど不可能である。ヴィットリオ・エマヌエル2世の肖像画の右手の壁には別に横向きの女性の写真が額に入れられ掛られている。文字がほとんど判読できない。エンマの若い頃の写真の可能性はある。左手前のクロスのかかるテーブルには恐らく並装丁のアルバム7冊が無造作に置かれている。

この事務所の写真に関しては、1889年6月24日付の妹エンマ宛書簡から、エンマからの返信でそこに写る兄アドルフォの光る頭をみて、兄が禿げているのかと尋ねるくだりがあったことが推察できるほか、ほかの書簡には家族へ送ったアドルフォ自身による写真を通して日本の風俗習慣を説明するというきわめて興味ある内容が読み取れる。禿げているように見える頭について、アドルフォは同じ手紙でこう説明する。「私の毛髪はその肖像写真に見えるほど白くもなければ、まばらでもない。そのように見えるのは、私たちが solarizzazione (伊語 ソラリザツィオーネ:すなわち現像中に、多量の露光を与えて特殊の効果を生み出すこと)と呼んでいること、窓辺近くに置かれた物体に常に起こることが原因である。それに修正を加えることはできたであろうが、私が行なった実験の過程でそれを撮っているのです、その欠点を斟酌しなかった。しかし、私の実験が成功したとわかり、素晴らしい写真が作れた時に、その写真を横浜中の住民一人一人に一枚プレゼントした」と得意げに書いている。

1888年7月21日の *The Japan Weekly Mail* 紙が伝える、A. Farsari & Co.'s の応接室で見られたというマグネシウム・ライトによる瞬間撮影写真の興味深い作例、すなわち花火が発火する瞬間をじっと見ている子供5人を含む15人の人々を写した夜景写真は、上記のファルサーリの手紙と時期的に符合するので、ことによるとその実験の成果であろうか。

ヴィチエンツァ市立美術館所蔵の同アルバムに収録された写真は、上記の扉絵と事務所の写真のほか4枚を除き、その他45枚は、現在横浜開港資料館に所蔵される“VIEWS & COSTUME of JAPAN. A. FARSARI & CO., YOKOHAMA”という表題をもつファルサーリの写真アルバム(所蔵番号 AC1-144)の写真と同じであるが、それと比べ、手彩色は一段と保存状態がよい上、より美しいと思われる。黒地蒔絵装丁板の裏カバーには、桐、



図3 A. ファルサーリが両親に送った写真アルバムの扉絵、ヴィチエンツァ市立美術館 ▶ p. 5



図4 事務所のデスクに坐るアドルフォ・ファルサーリ(上記の写真アルバム第1葉)ヴィチエンツァ、(キエルカーティ宮)市立美術館 ▶ p. 5



図5 図4の部分



図6 琴を弾く若い娘、木版画(ヴィチェンツァ、市立美術館の写真アルバムに挟まれた薄紙)

れ「琴を弾く若い娘」と「墨竹図」をあしらった版画刷りの薄紙が挟んである。それらには、“A. FARSARI & Co., PHOTOGRAPHERS, PAINTERS, SURVEYORS, PUBLISHERS & COMMISSION AGENTS. No.16 Bunt, Yokohama, Japan.”と、文言が刷り込まれている(図6)。実は、早稲田大学図書館所蔵の4冊の『^(ママ)ファーサリ写真帖』の1冊(HD 1955-1)の表遊び紙に、この「墨竹図」の薄紙が貼り付けられていることが指摘されている(参照:藤原秀之「早稲田大学図書館所蔵 明治期彩色写真帖」、『早稲田大学図書館紀要』第52号 2005年 p.41)。また、長崎大学中央図書館所蔵のアルバムには、このほかにも別の図柄の薄紙が挟まれている。ファルサーリが家族に贈った見本アルバムにもその薄紙が挟んであるところから、こうした薄紙はファルサーリ商会の外国向けの商標みたいなものであると考えられる。

これに対し、ベルトリアーナ図書館所蔵のファルサーリ写真アルバムには、“Fotografie Giaponesi”^(ママ)とあり、日本の綴りの間違いをはじめ、写真のあまりに無頓着な貼り付け具合やカバーの種類を勘案すると、同図書館に入る前にイタリアで装丁が変更されたと考えて間違いない。筆者の調査班のイタリア人写真家による全写真の複写は、館長から許可されなかったため、同アルバムに無造作に張り込まれたアドルフォのプライベートな白黒写真のみの撮影にとどめた。しかし、これらが一級の史料価値を有することには、図書館は全く気づいていなかった。

そのうちから、何枚かを紹介しよう。1889年2月のエンマ宛書簡で、「ここに同封します *The Japan Directory* 紙のページからお分りのように、多くの者からなる参謀本部[企業本部のこと]を持っています。31人ですが、そのうちには画家や写真焼付け師などなど、さらに給仕2人に料理人1人がいます。」と書いている。このほか15年来の知り合いのマネージャー一人がいるとも述べている。ここに掲載した写真には23人、うち二人が洋服、21人が和服着用で写っている(図7)。ファルサーリ商会は、*The Japan Directory* では、社主ファルサーリ、支配人殿倉常太郎、庶務 J. A. Kilgour、写真技師渡辺徳之助以下5人、焼付け師 T. Takahashi 以下3人、筆工 S. Owaki、製本師 T. Misumi、着色師 S. Subuki 以下

葵、菊という豊臣家、徳川家および天皇家の紋の蒔絵が施され、イタリアの家族に日本の歴史と現在の姿を自身の写真を通して伝えようとするアドルフォのいかにも粋な趣向がうかがわれる。しかし、横浜開港資料館所蔵アルバムの写真にはほとんどすべてに、通例写真下辺の左隅もしくは右隅にネガ番号と英文タイトルが焼き付けられているが、ヴィチェンツァのアルバムの写真はネガ番号とタイトルの焼き付けられた下辺を切り落としてから台紙に貼られていることがわかる。また、同アルバムの表カバーと遊び紙のあいだと、裏の遊び紙と裏カバーのあいだに、それぞ



図7 ファルサーリ商会の従業員たち(ヴィチェンツァ ベルトリアーナ市立図書館所蔵の写真アルバムに貼られた白黒写真)



図8 神風楼の庭に女将と女郎たちというアドルフォ・ファルサーリ(ヴィチェンツァ ベルトリアーナ市立図書館所蔵の写真アルバムに貼られた白黒写真)



図9 神風楼のテラスで長椅子に寝そべる女郎(同上)

19人、大工 R. Eda の合計33人からなる大所帯である。しかし、1895年の“Meiklejohn’s Directory”では、ファルサーリは、マネージャー 1人、外国人の助手1人、日本人 operetor 1人、8人の助手 assitants、12人の着色師 painters と丁稚 boys 2人、都合25人を抱えているとある。いずれにしても、この集合写真は、疑いなくファルサーリ商会の従業員を写した写真である。

ほかには、神奈川(高島町)にあった神風楼の中庭で女将と女郎たちに囲まれて座るファルサーリ自身を写した写真(図8)や懇意にしていた同楼閣の娘を写した数枚の写真(図9)と、特に興味深いのは、人間チェス・ゲームに扮する2チームそれぞれを集団で写した写真2枚である(図10、11)。ほかでもない、帰国後のアドルフォの奇矯な行動や地元の風刺新聞『ラ・フレッチャ』寄稿文などから考えると、ヴィチェンツァ近郊のマロステイカ Marostica の町で現在もおこなわれる「人間チェス・ゲーム The Chess Match with live chessmen」を模した催しを、横浜界限で挙行した可能性があるが、目下のところ、写っている建物および景観は特定できない。一方、写っているチェス・メンバーは、ファルサーリが1879年に入会し、1882年には支部 the Star in the East Lodge No. 640 の事務局長もしていたスコットランドのフリーメーソン支部仲間の外国人家族であろう。ファルサーリは、1883年12月19日には横浜支部 Yokohama Lodge No. 1092 に所属が移って、1885年12月31日まで主要メンバーとして活躍した。テリー・ベネットによるエディンバラでのフリーメーソン会員名簿の調査によって、ファルサーリはアメリカ滞在時にブルックリンの支部 Brooklyn Lodge No. 451 の会員であったことも判明した。憶測にすぎないが、アドルフォがアメリカ合衆国へむけ出国したのにも、横浜に来たのにも、スコットランドのフリーメーソン組織が深くかかわっていた可能性がある。

最後の一枚は、ほぼ疑いなく1890年4月12日に横浜からイタリアへ帰るのに乗船した蒸気船コンゴ号の甲板上で撮影した写真である。向かって左端にアドルフォ自身が写っている(図12)。また、集団の真ん中に写っている幼い女子は、娘キクで、一人写っている和服姿の日本女性は、外国人の子供の世話をするいわゆる「アマ」さんで、文字通りキクの世話役として乗船した可能性が高い。ヴィチェンツァ帰郷後、1890年6月1日に5歳弱のキクがドロテア女子修道院寄宿舎に入ってから撮影された、裏面に同年10月4日という書き込みのある写真(図13)と比べ、容貌が似ているからだ。

そのドロテア女子修道院にキクの遺品11品が収蔵されている。その中に、横浜A.ファルサーリ商会の広告ちらしの貼り付けてある粘葉(でっちゃん)装の「日本の写真」アルバム一冊、布張りケース入りがある。同写真アルバムには、端から端まで伸ばした表裏両面に日本の風景、建物、風俗の写真がそれぞれ13枚、計26枚貼り付けてある。手彩色も、ヴィチェンツァ市立美術館所蔵のアルバム写真に劣らず、きれいだ。1888



図10 チェスの生きた黒駒に扮した男女、(同上)



図11 チェスの生きた白駒に扮した男女、(同上)



図12 1890年に蒸気船コンゴ号の甲板にいるアドルフォ・ファルサーリと娘キク、(同上)



図13 キク5歳の写真(撮影 Farina & Bolla, 4 October 1890)、ヴィチェンツァ、ドロテア女子修道院

年9月8日の“The Japan Weekly Mail”(p.226)には、「日本の発想に合わせたような1年の四季 — 満開の桜の花、あやめの池、紅葉の楓、新雪 — を示す写真アルバムをまとめ上げるのは、よいアイデアである。これはファルサーリ氏の恵まれたインスピレーションのなせることである」と記されている。キク遺品のアルバムには、これら4枚の写真があり、各写真に番号と順に CHERRY BLOSSOMS (SPRING)、IRIS, SUMMER、MAPLE (AUTUMN)、SNOW (WINTER)とタイトルがある。さらに、IRIS, SUMMER あやめ(夏)【撮影場所は、堀切の菖蒲園、東京、ヴィチェンツァ、ドロテア女子修道院】には、アドルフォ自身と彼の商会の従業員がともに写っている(図14)。長崎大学中央図書館所蔵のアルバムにも同じ写真がある。



図14 Iris, Summer(堀切の菖蒲園、東京)、ヴィチェンツァ、ドロテア女子修道院

遺品でもうひとつ特筆に値するのは、金の指輪である。指輪に嵌められていた宝石は失われている。実は、指輪の内側を写した写真(図15)では判読するのは困難であるが、そこにはラテン語で“Ortus Junxit mors non separabit 19th Februarii 1882 Adolfo Farsari”と刻まれている。訳出すると、「出生が結び、死が切り離すことはないであろう。1882年2月19日アドルフォ・ファルサーリ」となる。管見のかぎり、ラテン語およびイタリア語の文献にこのような文句は見出せない。学識ある読書家であったアドルフォ・ファルサーリのことから、アドルフォとキクの母との契りを記念する銘文として刻んだのか、より可能性があるのは、上述の1882年にフリーメーソン支部 the Star in the East Lodge No. 640 の事務局長に任命された際の宣誓を刻む指輪であろう。



図15 アドルフォ・ファルサーリの遺品の指輪、ヴィチェンツァ、ドロテア女子修道院

2. アドルフォ・ファルサーリの写真の評価

1889年6月24日のエンマ宛ての長い手紙で言及される、同年日本を訪れ8カ月間滞在したバルディの伯爵、ブルボン家のエンリコ閣下とその一行とファルサーリ商会との関係についても簡単に触れる。同一行には、ヴィチェンツァ出身のベルメの伯爵アレッシンドロ・ツイレリが随行し、世界就航のあいだ日誌をつけていた。未公開の同日誌15冊のうち、日本滞在に関する日誌部分の transcription および翻訳はヴェネツィア東洋美術館館長 Fiorella Spadavecchia と筆者の同僚浦一章によって進められた。それによると、バルディ伯爵エンリコ一行は、横浜では1889年6月14日から20日のあいだにファルサーリ商会のほか、玉村康三郎、ウォルシュ商会、そしておそらくディーケン(Deaken)のところでも写真を注文している。

例えば、横浜、1889年6月15日(土)の日誌には、

「7時、殿下夫人および男爵夫人とミサに行く。その後、殿下とともにホテルの裏手に住むウォルシュを訪ねて写真を選ぶ。辛いことだが、写真屋のうち一方が他方より美しいコレクションをもっており、最後にはすでに買ってしまったことを後悔し、2重買いする羽目になってしまう。ファルサーリの写真の方がすぐれたものとして通用している。他の写真とは違い、彩色した彼の写真は時がたっても色褪せないが、たいへん高価である。昼食前にヒルデブラントとブルーフ(?), つまりホテル近くの小さな岡に登る。瀟洒な別荘や庭園でいっぱい岡である。クロイトナー領事を訪ねるのが目的だったが、領事はいなかった。〈……〉」

また、横浜、1889年6月20日(木)の日誌には、

「今日は聖体節，9時半の歌ミサのようなものに行く。殿下夫人のお伴をしてウォルシュのところに行く。和服姿の写真を撮ってもらうためである。殿下は同じことをしてもらうためにファルサーリのところに行く。あっちからこっちへと何度か使い走りをする，誤解はとり除かれてファルサーリのところに行く。ファルサーリは和服姿の殿下夫妻をさまざま撮影した。ある写真では私が光栄にも，夫妻がなさっている囲碁の審判として写っている。おふたりも青白の袴・袴で正装をなさっている(図16)。たいそう暑く，ひどく息苦しい。われらの和服もその害を被った。2時になってようやく昼食に帰る。〈……〉」

とある¹⁵⁾。

ファルサーリ商会の写真の品質および価格の高さは、横浜中で評判であった。1887年に彼の許を訪れたスコットランドの写真家ウィリアム・K・バートンは記事のなかで、ファルサーリの手彩色の美しさと色褪せないその技術を絶賛している。

おわりに

1890年に娘キクを連れてヴィチエンツァに戻ってからは、アドルフォは親しい友人たちはいたものの、町では風変わりな人物との評判であった。地元の風刺新聞『ラ・フレッチャ』に、例えば自身のカリカチュアを添えた記事「逆にまた、ヨーロッパと日本 Viceversa Europa e Giappone」を寄稿して、大変機知に富む日本と西欧の風習の比較をしたり、脚本など見つかっていないが、「騎士アドルフォ・ファルサーリの日本での冒険 Le avventure del Cavaliere Adolfo Farsari al Giappone」という滑稽劇を上演したりした。実際、彼は1890年に、イタリア国王ウンベルト2世から王冠勲章を授与されていたが、国籍の再取得はかなわなかった。

2020年のローマ巡回展のために筆者がおこなったビデオ・レクチャーでは、アドルフォ・ファルサーリの日本での冒険が、トム・クルーズ主演、渡辺謙助演の2003年の映画「The Last Samurai」の制作に影響を与えた可能性についても言及した。映画の舞台が1877年の西南戦争(すなわちアドルフォの来日1年後)であり、西郷隆盛をモデルにした勝元軍と戦うために日本政府に雇われた主人公は、南北戦争の元北軍大尉であって、しかも彼のガイド役はアメリカ人写真家である。本論で言及したエーレナ・ダル・プラがアメリカでアドルフォとその家族の足跡探しをした折に、ハリウッド映画の関係者と接触したという確かな情報もあったからだ。



図16 羽織袴姿のバルディ伯爵エンリコ・デ・イ・ボルボーネ(ファルサーリ商会撮影、1889年6月)

註

- 1) 平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書(課題番号:17320025):「1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討—写真家アドルフォ・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレッサンドロ・ツイレーリ伯爵の日本での活動—“A Reconsideration of the History of Artistic Exchanges on a Personal Level between Japan and Italy in the 1880s: The Japanese Activities of the Photographer Adolfo Farsari and Count Alessandro Zileri, Secretary of the Retinue of Count Enrico di Bardi of Bourbon”], Edited by S. OSANO, The University of Tokyo, March, 2008.
- 2) 小佐野重利・木下直之、『アドルフォ・ファルサーリ写真展 開港地横浜のイタリア人写真師 *Adolfo Farsari — Il fotografo italiano che ha ritratto il Giappone di fine '800*』(共同監修、テキスト日伊併記)、イタリア文化会館 Istituto Italiano di Cultura, 2013年2月。
- 3) *ADOLFO FARSARI Il fotografo italiano che ha ritratto il Giappone di fine '800* a cura di Osano Shigetoshi, 15 ottobre 2020 – 8 gennaio 2021, Istituto Giapponese di Cultura, Via Antonio Gramsci 74, Roma.
- 4) S. Osano, “The Present and Future of Research on Yokohama Photography: Insights Gleaned from the Latest Study of Adolfo Farsari”, 『古写真研究 *Old Photography Study*』, 第3号(2009), 長崎大学図書館, 2009年, pp.63–71.
- 5) S. Osano, “Adolfo Farsari fotografo dell’album “Viste e Costumi del Giappone” negli Anni Ottanta del XIX secolo”, *Asiatica Ambrosiana. Saggi e ricerche di cultura religioni e societa' dell’Asia*, 3, Città di Castello, 2011, pp. 105–128.
- 6) S. Osano, “Dagli incontri interculturali alle relazioni artistiche tra Italia e Giappone (From Intercultural Encounters to Artistic Relations Between Italy and Japan)”, 【未刊行】Milano, *International Symposium, Italy and Japan: Relations and Exchanges through the Arts*, 2018年4月5日、(Università di Milano, Sala Napoleonica, via Sant’Antonio, 12 – Milano)
- 7) Osano Shigetoshi, “ADOLFO FARSARI fotografo dell’album “Viste e Costumi del Giappone””, in Opuscolo della mostra: *ADOLFO FARSARI Il fotografo italiano che ha ritratto il Giappone di fine '800*, 15 ottobre 2020–8 gennaio 2021, Istituto Giapponese di Cultura in Roma, 2020; 【ビデオ・レクチャー】Osano Shigetoshi, *Le avventure del Cavaliere Adolfo Farsari al Giappone*: Istituto Giapponese di Cultura-You Tube <https://www.youtube.com/watch?v=2fGZ004awoc>
- 8) L. Gartlan, “A Chronology of Baron Raimund von Stillfried-Ratenicz (1839–1911)”, in J. Clark, *Japanese Exchanges in Art 1850s to 1930s, with Britain, continental Europe, and the USA*, Sydney, Power Publications, 2001, pp. 121–188; *Id.*, “Changing Views: The Early Topographical Photographs of Stillfried & Company”, in *Reflecting Truth: Japanese Photography in the Nineteenth Century*, edited by N. Coolidge Rousmaniere and M. Hirayama, Amsterdam, Hotei Publishing, 2004, pp. 40–65: ルーク・ガートラン「シュティールフリート写真館小史—巨匠と助手とライバル—」、横浜都市開発記念館・横浜開港資料館編『文明開化期の横浜・東京—古写真でみる風景—』、東京、有隣堂、2007年、pp. 217–222.
- 9) 斎藤多喜夫『幕末明治横浜写真館物語』、吉川弘文館、2004年。
- 10) T. Bennett, *Old Japanese Photographs. Collector’s Data Guide*, London, 2006; *Id.*, *Photography in Japan 1853–1912*, Singapore 2006, in particular on Farsari, pp. 219–223.
- 11) E. DAL PRA, “Adolfo Farsari, un avventuriero fotografo”, in *Domina*, 1991, pp. 20; *Id.*, “L’avventura giapponese di Adolfo Farsari (1841–1898)”, in *Il Giappone* (rivista dell’Istituto Giapponese di Cultura, Roma) XXXIII (1993), pp. 45–61.
- 12) L. BERETTA, “Adolfo Farsari: An Italian Photographer in Meiji Japan”, in *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, IV series, vol. 11 (1996), pp. 33–48; *Id.*, “Obiettivo sul Giappone Meiji (2): Adolfo Farsari”, (written in Italian and Japanese), in *Viste dalla Camera* (Journal of the Italian Chamber of Commerce in Japan), March/April 2000, pp. 14–15.
- 13) *Un vicentino nel Giappone dell’Ottocento. Adolfo Farsari fotografo tra ideali e imprenditoria*, catalogo della mostra, Biblioteca Civica Bertoliana, Vicenza 2005.
- 14) 前掲註(1)の報告書の資料Bアドルフォおよびキク・ファルサーリ関連資料、pp. 62–68.
- 15) 前掲註(1)の報告書の資料D エンリーコ・ボルポーネー一行の横浜滞在記、特にp. 100とp. 103.